なく理性において把えられるような認識によらなくてはならない。それはそれとして、今の私たちの問題は、自然科學の認識に限られるが、自然科學の方でいちばんに典型的なのは、何としても物理學である。カントが自然科學というときは、主として物理學を指しているのである。

すると、對象を認識するというときの對象とは、廣い意味での物理的な物や物理的過程のことをいうわけである。常識的にいうと、人々が物とか現象とかいっているものに當る。さて、右の引用文の初めに出ているあの「對象を認識する」という認識であるが、これは「考える」こととは別のことをいっている。諸の物の認識が成り立つには、カテゴリーが感受される諸の對象へ、言いかえれば、感性的直觀へ適用されることが必要である。考えるというだけでは、カテゴリーを働かせようとしているだけであるから、それが何かへ適用されていないことになる。對象を認識するためにはカテゴリーが感性的對象へ適用されるということが起って來なくてはならない。そのことがここにはしっかく言われている。

さてしかし、自然科學というと、私たちは數學のことをすぐ想い出すが、數學の認識はどうして成り立つか？　これは又大いに問題となるであろう。カントは數學の認識の成立についても、右の引用文で大切なことを言っている。數學は本質的には直接に感性的な物に關しての科學でないことを私たちはまず理解しておいて、右のカントの文を讀むと、素直に理解される。但し、カントの數學的認識の問題については、數學者や哲學者の間でまだ論究されぬ諸問題があって、未解決のものがいくらも



あるから、細いことは別の機會にゆずらねばならない。もう一つ、右の引用文の中で大切なことは、經驗（エルファールンク）が何であるかがやや明瞭になってきていることである。ところで、私たちの次の問題は、カテゴリーはどのようにして、感性的直觀へ、又は現象へ適用されるかという最も重要な問題である。なぜというに、これでもって認識ということが成しとげられるのだから。

## 第7節　人間のうちに隱れている術—シェマティスムス

ほんとうの意味での知識（ものを知りとること）、すなわち對象を認識するということは、どうしてできるかということ、これがカントを捕えている問題なのである。私たちは、認識は力であることをベーコンから教えられたし、考えるとは何か、物とは何かということを、それらは實體としては何であるかということにつけて、デカルトやスピノザから教えられたし、更にすすんで實體は單に存在するものでなくて、活動するものであることや、また活動するとは何であるかということを、ライプニッツを通じて知ることができた。他方にあって經驗論は知識が何であるかを示してくれるために、アイディアや感じ取ることやインプレッションが何であるかを、更にまた一八世紀のフランスの哲學者たちは、感覺や魂が何であるかを、私たちにそれぞれ教えてくれた。そうしてみると、私たちは「何であるか」という問い方を教えられ、その「何」について知らされたのであるということができる。ところがその點が、カントでは、問いの立て方や又解き方が異っているのではないであろうか。私たちは、コン

ディヤックが感覺が何であるかを説明したことを想い起してみると、興味あることに觸れる。彼は感じとることはどうして成立するかということをはっきりさせつつ、感覺とは何であるかを知らせてくれた。それと同じように、カントは私たち人間の認識はどうしてできあがるかということを知らせつつ、認識が何であるかを明らかにしようとしたのである。私はそういう問いの出し方、又解き方は、技術的だと思うのである。もののでき上ってゆく過程を知らせつつそのものが「何であるか」を解き、且つ認識させることが、實にカントの哲學の特徴だといえる。

人間の認識についてのカントの問題、從って私たちの當面の問題は、カテゴリーが如何に感性的直觀へ、又は現象へ適用されるかということである。

さて、適用するとは、あてはめることである。ところで、あてはめるにおいて、私たちはあてはめられるべき感性的直觀又は現象のあることを知っているし、あてはめの原型としてのカテゴリーもすでに私たちは所有している。私たちの知りたいのはあてはめられる仕方一つである。問題はここだ。私たちは例えばインクでもって畫かれた三つの線で圍まれた形を見ると、「三角形」だと見てとる。この「三角形」は幾何學でいう嚴しい意味での三角形である。これは畫くことのできぬものだ。* これをカントは「三角形の概念」と呼ぶ。それは、私たちの知性が前々からもっているものである。さて三角形だと、見てとったところにとにかくあてはめることがすでにされている。その場合「三角形の概念」は直ちにカテゴリーとは言えないが、カテゴリーのように知性に具っているア・プリオリのも



のである。そのような純粋な「概念」が適用されるのは、私たちの眼で見て感じとったあの三つの線で圍まれている形像がそうきめつけるのである。カテゴリーのような純粋な概念のことだから、相手さえそれにふさわしければ何にでも適用され得るのであるけれど、その相手は適用を容れてくれるのでなくてはならない。容れる容れないをきめるものがなくてはならないが、それがあのきめつけである。きめつけはその形像からくるのであり、形像は眼で見て感じ取られたものなのであるから感性的である。だから、右のきめつけは感性的きめつけである。これは純粋なる知性の側には屬しない。カントはこうしたきめつけを Bedingung（制約づけ）と呼ぶ。では、感性的きめつけが對象の認識にとっては中心的に大切である。感性的きめつけが、何が對象として認識されるかを、決定するともいえるのである。しかし、形像から來るこのきめつけは、知識がものを規定するようなそんな現實的なきめつけとは違う。なぜというに、形像はまだ認識されたものではないので、そのきめつけは少しも法則的ではない。ただ制約づけるだけである。カントのいう形像（Bild）とは幾何學や物理學で確實に取扱われているような物ではない。感じとられたものではあっても、まだ認識されたものではないのであるから。學問や常識のなかで物といわれるものがはっきりした認識となっているのは、カテゴリーの又はカテゴリーのように前々（ア・プリオリ）のものの適用をすでにうけているものなのである。私たちはその適用を問題にしているのである。

* カントは幾何學についてもデカルトの影響を強くうけていると思われるが、デカルトは幾何學の線や面や

點につけて次のようなことを言っている。（一六三八年一〇月一一日附手紙）。よく味ってみたい言葉である。

「線或は面は、點よりもより大きいしっかりした物であるとは言えないし、絶對に大きいとも言えない。」

さて、カントはその感性的きめつけのことを Schema（シェーマ、普通に圖式と譯されている）と呼んだ。

では、いったい、どうしてかような、きめつけが容れられるのであろう。それは、カテゴリーが感性的直觀へ又は現象へあてはめられていいようになっているからである。では、あてはめられていいとは何をいうのであるか。それは、例えば感じとられた三つの線で圍まれているあの形像とア・プリオリな「三角形」という純粋な概念とが似ているからである。似ているというよりも、同種的であったからである。

そこで、私たちはバークリが示し得たあの秀れた思索を想い起さないではいられない。バークリはアイディアは外物の寫しではない、だって、外々しい外なる物とアイディアとがどうして眞の寫しという關係になれるか、音は見るものでなく、色は聞くものでないように、同種的なものでないなら感じとることすらできぬではないか、だから、そのような外々しい外なる物を想定する必要はない、たとえ想定したところで似もつかぬものなら致し方がないではないか、一切のものはアイディアである、と徹底的なアイディアリズムを唱えたのだった。同種的ということについてのバークリの右の考えはたしかに急所をついている。感じとられるものと知られるものとの間の同種性のことは、バーク



リ以外においても、私たちはこの哲學史入門の中で知り得たのであった。カントは、「皿というけいけん的（感受しとられた、すなわち empirisch な）概念は、圓という幾何學的概念と同種性をもっている。なぜというに、皿において思われている『まるさ』は、幾何學的圓において直觀せられるから。」と言っている。幾何學でいう「圓」というような概念、その他そういうような知性的な純粋な概念は、何としてもけいけん的な、從って一般に感性的な直觀とは全く異種的なものである。どんな直觀においても、その中には純粋な概念は見つかりっこはない。全く別のものである。カントは又こう言っている。「カテゴリー、例えば原因性というカテゴリーが、感覺によっても見てとられる、などということを言う人は、よもやありはすまい。」私たちはヒュームが言ったように、ただ感じとられたものの世界のうちをいくら探してみても、そこに因果という關係を探り出すことは、できないのである。ヒュームはこのことで大層困惑し、そしてあのような懷疑的な説に落ちていったのであった。そうすると、カントは、いったいどうしてけいけん的な直觀がカテゴリーの下へ收められるという困難な問題を解くのであろうか。言いかえれば、どうしてカテゴリーが現象へ適用されるというのであろうか。それを解くのが、さきの同種性である。一方にカテゴリー、他方に現象があるわけであるが、それはそのままでは似てもつかぬもので、同種的ではない。それなら、きっとここに第三者があって、それが媒介をして、あの適用を可能にさせているのではないか。何としても事實右のような適用は人間の認識の中で行われているのだから。一方でカテゴリーと同種的であり、他方で現象と同種的である第三者がここにあるに違

いない。これが、カテゴリーが現象へ適用されることを、可能にさせているのでなくてはならない。カテゴリーと同種的なのだから一面では知性的であり、他面では（感じ取られたままの多様なもの即ち現象と同種的なのだから）感性的である。そういったような第三者がここになくてはならない。カントはそう思索した。そして、それを彼はシェーマと呼んだ。更にその意味をはっきりさせるために、それをトランスツェンデンターレス・シェーマ*と呼んだ。

* トランスツェンデンタール（transzendental）とは、「先驗的」とか「超越的」とか「超驗的」とか譯されているがそれではよく理解され得ない。ラテン語の transsendere すなわち「越える」ということがもとの意義であって、感性的なものを越えているという意味がまず根本にあるわけである。といっても、感性的なものを越えるのであるから、感性的なものと何の關係もないのではなく、感性的であるが、單にそれだけにとどまるのでなくて、感性的なものをのり越えている。では、感性的でないのかというと、感性的でないものが感性的なものを越えているということはあり得ない。そうすると、越えるとは出てしまって無關係だという意味でなく、むしろ越えるということの中に含まれている運動的なもの、この意義がカントの狙いなのである。だから、トランスツェンデンタールなシェーマというと、このシェーマ即ちきめつけは、その性質が感性的であるようであって感性的なものにきまつては居ず、さりとて感性から全く純粹なものにとどまってもいない、そのように固定的にとどまることをなし得ないひとつの動的なきめつけ（シェーマ）、まさにそういう意味のものである。カントはトランスツェンデンタールに對立させてけいけん的（empirisch）ということを言うが、これは感性的なことにとどまっているもののことである。カントは「感覺を通じてかかり合う」ようなものをエンピリッシュと解釋している。觸れることがあつて、感覺せられれば感覺せられる、感覺せられないなら、ない、というように事はまことに單純である。そういうものがけいけん的なものなの



である。私たちは試みに、トランスツェンデンタールを「超感性的」と譯してみることにしよう。

そういうシェーマは具體的に言つたら、どんなものなのであらう。カントはそれは時間だとした。時間とは何であろうか。ニュートンは前述のように空間を量的なものと見たが、時間も同様に量的に見た。ニュートンは「眞なる true」時間と「見かけ上 apparent」のそれとを分けたが、その眞なる時間にしても「一様に流れる」ものであると解釋した。物理學では、ニュートン以後色々と時間解釋の企てはされているが「一様 equally」であるかどうかについては訂正もあったが、移りゆくものという根本の意味はくつがえされてはいない。カントはそういう物理的時間はもちろん認めるが、今シェーマにおいて言う時間はそんなのではない。カントは時間（Zeit）というものに「きめる」とか「限定する」という如き意味のものを見出すのである。流れるとか移るとかいえば、流れるもの移るものがあたかも河の水のように思い浮べられるが、時間そのものはそのようなものでない。（河の水とか流れる線のようなものなら、むしろそれは空間であることになる。）時間は何かを「きめる」ようなものではないであろうか。流れるとか移るということをいうにしても、そこに空間的なものの外に「きめる」ということがあるのではないであろうか。カントは「時間限定」（Zeitbestimmung）ということを言うが、これは大切なことである。

さて、時間がそのシェーマに當るというのは、どうしてであろう。前に述べたように、知性そのものがするはたらきとしての考えは、つまりは單に結合をすることに外ならない。けれども、結合とい

う以上、そこには多様なものが前提されている。結合とは多様の結合である。してみると、知性のカテゴリーがはたらくには多様なものがそこに共にあることが考えられる。そこで、時間であるが、時間だって多様をふくんでいる。多様をふくむといっても、時間は空間とは違っている。私たちが感じ取ることをする場合、外界に属するものと内界に属するものとがある。外なるものはデカルトやラ・メトリーが考えたように擴がりあるものであるが、時間はそういうものではあり得ない。カントは、時間は内界における感性の形式だとする。そうすることは當然である。私たちは内感にも多様を許さねばならないから内感における時間の多様といわれるものが當然認められねばならない。つまり多様をふくむという點で、時間とカテゴリーは同種的である。尚又、カテゴリーは感性的なものではないので、従ってア・プリオリのものであり、時間がまた超感性的であるから、その點でカテゴリーと時間は同種的である。次に今度は、現象と時間との關係であるが、時間は私たちのあらゆるけいけん的なアイディア（表象）のうちにふくまれている。その點で、時間は現象と同種的である。かようにして、時間が一方では純粋な知性のカテゴリーと同種的、他方では現象と同種的であって、第三者として媒介の役をなすことができる。カントはこのように、超感性的な時間限定によってはじめて、カテゴリーが現象へ適用されることができる、と説明したのである。

シェーマというきめつけはどんなものか、それをもっと明瞭にしてみよう。私は先きに「形像がきめつけるのである」と言った。又きめつけは「形像からきたのである」と言った。私たち人間の體驗



のなかでは、形像というものは恰も法則でもあるかのようにきめつけるものである。このことをはっきりさせるために、例をあげてみよう。東洋人の言う「形が威儀をたださせる」ということは大いに意義のあることであると思われる。中國の古典のうちにある「禮」なるものは、形でもってする規定をさしていっているのである。とにかく、形像はきめつけることを一つの本性としている。けれども、形像がすぐにシェーマではないのである。カントはその點を次の様に明らかにしている。「私が數の五を數える場合、點を・・・・・というように打つとする、それは畫かれた點であるから、形像である。ところが、私が數というものを（だから、五でもあり得るし百でもあり得るし千でもあり得るという數を）考える場合は、どうであろう。その場合の考えるは、一定の概念にしたがって、ある量の集り（だから、百なら百、千なら千）を、ひとつの形像にして見てとるその仕方のことである。だから、考えることは形像ではない。例えば千というような數になると、千のなかをずっと見渡し、それを概念と比べてみるということは仲々できることではない。だから、そのように千のなかにある一つ一つ見くらべできぬものを何とか表し出さねばならぬから、その概念に形像をつける、形像を與える。その一般的な遣り方、振るまい方を、私はその概念に對するシェーマと呼ぶのである。」カントはこの様に説明してくれている。三角形というひとつの概念と三角形の形像とは決して十分には一致していない。三角形といわれるもの（＝概念）は、直角三角形にも二等邊三角形にも、だからどんな三角形にも一般的にあてはまる。そのような一般性をもたぬものが、三角形の形像なのである。形像

とはそのようなものである。ところが、シェーマとなると、形像からくるきめつけのことであるから、それ自身形像ではなく、シェーマはむしろ考えることのなかにしかあり得ない。つまり純粋な知性のもとにしかあり得ない。數學的な、だからア・プリオリな概念については、以上の通りであるが、けいけん的な概念においても同様である。いや、ここでは形像と概念とが一致しないことは、數學的概念の場合に劣らない。前例に出た皿は私たちが感性的に受けとっているものであるし、又皿というもの（皿という概念）でもある。それはけいけん的概念と呼べる。私たちは日日じっさいに個々の體驗において皿の形像をもっている。この形像は私たちの皿なるけいけん的概念と決して合致しはしない。合致することはできないのである。むしろ、このけいけん的概念は概念なのであるから、形像と一致するのでなく、形像からくるあのシェーマと關係をもつだけである。

そのようなシェーマは、形像からくるというように言ったが、そして、事實カントもそのような言い方をするが、それではまだ十分の説明にはなっていない。シェーマと形像（ビルト）の關係にはもっと探ってみるべきものがあるのである。この探求からカントが思索しとったものが、カントのあの描形力（Einbildungskraft）である。人間が形像（ビルト）を描く力である。これまで「構想力」と譯されてきたものが、それである。「構想力」ということばはアインビルデゥンクスクラフトの意味を表し得ない。「構想」という日本語には姿や形をえがく意味は少しもない。形像を描く（einbilden）ということが出ていなくてはならない。だから、むしろ「想像力」とした方がずっとあたっているくらいである。



認識は經驗（エルファールンク）のなかにあることについて、もう一度述べて置こう。

私たちは今や認識はどういうように構成されているかを把えてみるところへ來ている。私はこの本の最初から次のような種々なる事柄をあげてきた。「思索する」、「感覺する」、「感じとる」、「感じ受ける」、「疑ってみる」、「探求をすすめる」、「思う」、「アイディアをもつ」、「觀る」、「現われる」、「在る」、「與えられている」、「知っている」、等々である。總じて、これらのことは何を意味しているのであるか。それは私たちが經驗していることを言っているのである。以上の種々なる事柄は、私たちが私たちのうちに經驗するところのものである。從って、認識といえどもこうした經驗のうちなることでなくてはならない。私たちが實際にやって居るところのものである。實際に踐（ふ）んで知っていることである。實踐しているのである。實踐している私たちのこのような世界はまことに廣いといっていい。カントが Er-fahrung と呼んだものはそのことでなくてはならない。私たちは「認識」を經驗しているのである。言いかえれば、認識は經驗のなかにあるのである。カントは「私たちのすべての認識はあらゆる可能的な經驗（エルファールンク）全體のうちにある」と言っている。（「原則の分析論」の第一章）。では、經驗（エルファールンク）のなかのどういうことが認識なのであるか。經驗する（erfahren）とは私たちがじっさいにやってきて居り、じっさいにやっていることである。私たちは思うことの仕方（カテゴリー）を抽象してみた。又、私たちは觀ることの仕方（純粋なる時間と空間）とを抽き出して考えてみた。いったい、そういう思うや觀るは、私たちがじっさいやっている日常の實踐のうちにあるのではあるが、特に哲

學する者が經驗のなかから抽いてみたものであることはまちがいない。況や、思うことの仕方（カテゴリー）や觀ることの仕方（純粹な時間や空間）は抽いてみた中の更に又抽いてみたところのもので、全く抽象的である。そういう仕方（形式）が純粹だというのは、かように抽象されて成立しているのをさして言うのである。

ところが、私たちが、例えば、花を眼で見ているときは視覺を通じて外物を見ているし、感覺している。さて、そうしたとき私が花から來る光線を網膜に集中させ映像を結ばせているときは、その際の外的刺戟のみでなく、私の心の中で心がつくる「花」なる像が內から働いているのである。カントは描形力又は想像力（Einbildungskraft）ということを言ったが、それはこの形像をつくる力のことである。これは心が物を觀るのである。デカルトのところで私たちは「エフィンゴー」について知った。あのときは、心は特に緊張をもっているということを知った。これは內感といっていいものである。とにかく、物を見るとなると、感覺的刺戟をじっさいに受けているか又は或る緊張をじっさいにやっているわけである。そういうものは外感と內感の區別はあるが、私たちがじっさいに體驗するところである。そういうものをカントはエンピリッシュ empirisch と呼んだのである。エンピリッシュとは感覺を通うして受け入れたもののことである。

さて、私たちが先きに純粹なる仕方（形式）と呼んだカテゴリーや時間や空間の形式は、私たちが觸れたり感じたり、興奮で受けとったりするものではない。つまり、エンピリッシュではないのである。もちろん、そのような諸の形式とても私たちが踐んで實際にやってきたもの、卽ち經驗に根ざしているものではある。けれども、あのような純粹なる諸の形式はエンピリッシュではないのであるから、直ちに經驗から來ているとは言えない。カントがそこを把えてア・プリオリ（a priori）のものだと言ったのは、その意味である。しかし、ものを觀る（この中には物を眼で見るのももちろん入っている）ことになると、全くエンピリッシュであって、直ちに經驗することから來ている。つまりア・プリオリでなくて、ア・ポステリオリなるものである。

そうすると私たちは、經驗から直ちに來ていない・すなわち、抽象されてできている・從ってア・プリオリだと言ってよいものとしての、思うことの根本的な仕方としての諸のカテゴリーと、觀ることの仕方としての空間と時間とがあることを、知ったわけである。いずれも純粹なる形式として理解される。それ故、思うことと觀ることとは、對立している全く異ったものであるけれども、それにもかかわらず、ア・プリオリなる點では全く同等なのである。而も双方の純粹なる形式共に直ぐには經驗から來てはいないが、しかし、もともと經驗（エルファールング）のうちなるものであることに變りはない。

私たちは、このようにして、漸次に認識なるものの構成を把えることに近づいてきた。

私は先きに認識とはものが知り取られることであるとした。ものが知り取られることの以前に何ものかが（但し複數として現われるが）とにかくあることを、カントは率直に認めている。これはバークリの認めなかったことである。

私たちはカントと共に私の外に「諸の對象」のあることを認めよう。これらの對象の内には、私たちの外にあって感覺を通じて受け入れられるものもあれば、心のなかで心の興奮を通じて受けとられたものもある。いずれにしても、諸の對象とは多種なるものである。カントが私たちの表象のもとになっているものを多様なるもの（Das Mannigfaltige）と呼んだことも、私たちはもうすでに知っている。多様なすがたであるそうしたものは、前述のア・プリオリなものと呼ばれた觀ることの純粋形式や思うことの純粋形式とは全く違っているもので、感覺や内的感受を通じて受け入れられるのである。つまり、エンピリッシュであるから、その都度その都度出ては消え出ては消えるものである。多種多様だといわれる性質はそうしたことにある。しかし、そのように多様であって、はっきりした統一 Einheit というものがないけれども、私たちはそれだからといってやはり「諸の對象」という言い方をして一つに把えることはしているのである。出ては消え出ては消えるものをその瞬間瞬間に一つ一つ指摘しているのであればとにかくであるが、そういうことは思うことと關けいすることもできず、知ることとも無關けいである。私たちは諸の對象は多様でありエンピリッシュではあるが、これをとにかく一つにして、つまり綜合して「諸の對象」と呼ぶことができるし、事實そう呼ぶより外に仕方がない。そうだとすれば、ここに確かに一種の綜合があるといわなければならない。

ところで、さきの思うはその純粋性においていえば、私が私を思うのである。その思われる「私」であるが、これはいくら純粋のものでも「思われたもの」として幾つでもあり得る筈である。だから、



思うとは、一つに結んでいることである。思うによって思われたものは同一のものとしての資格をもっている。現われたり消えたりするのでなくて、同一的である。思うとは實に根本的な一つの結合である。この結合でも前述の如くとにかく多様はあるのだから、それは多様一般を一つに結ぶこと以外の何ものでもない。結ばれた結果といえば、思うの同一性が出てきていることである。それだけのことである。だから、この結合は純一である。さきの「諸の對象」の場合に一つになっているという綜合とは全く異っている。思うの場合、一つに結ばれていることは「結合」と呼ばれる。諸の對象の場合は、一つに結ばれているのを「綜合」と呼ぶ。この二つのものを混同しては、思うことと觀ることを取り違えると同じ程度に、問題を紛きゅうさせることになる。カントは思うの側で一つに結ばれているのを Verbindung（結合）と呼び、諸の對象の側で一つに結ばれているのを Synthesis（綜合）と呼んだ。ジンテーシスの方では、特にむすぶという語に當るものを、ドイツ語でいうと、verknüpfen（繋ぎ合わす）という言葉が適當している。カントはこれらの語をまことに嚴密に區別して用いる。カントにおいては、用語がはっきりして、それでもって思索が確實にすすんでいる。

カントは統覺（Apperzeption）という語を用いる。思うとは一つに統合することすなわち統覺のはたらきである。もし、この統覺になぞらえて、諸の對象の多種多様なるものが一つにされているところを名づけるならば、Apprehension アップレヘンションと呼んで區別すればいいのである。

結合（フェアビンドゥンク）は思うの側で言われ、綜合（ジンテーシス）の方は觀ることの側で言われるのである。對立した反對の側

に見出されているけれども、しかしいずれも、一つに結ばれるということに於いて軌を一つにしている。全く異った面と同一の面とが此處にも見出されることに、留意して置かねばならない。

私たちは一方に諸の對象のあるのを認めねばならない。それらの對象は考え出されたり思い出されたものであるのでなくて、形を觀ることにもとづくものである。空間と時間とはこの觀ることの仕方であった。さて、しかし、他方に思うという根本的な結合のあることを認めねばならない。思うはそれの本質上決して恣意的なものでなくて、思うの仕方を具えている。その仕方に據っていてはじめて、思うは認識の根柢にあり得る思うなるものなのである。そのいくつかの仕方がカテゴリエンと呼ばれたのである。私たちが觀ると思うの双方に、右のように反對しているが同一でもあるものを想定せねばならぬとすると、カテゴリーと諸の對象とはどういう關けいにあるのであろうか。言いかえると、カテゴリーは如何ようにして諸の對象にもってゆかれるのであろうか。カテゴリーとは純粋なる思うの仕方であるが、仕方はどういう工合にして使用されるのであろうか。それが適用されてこそ、私たちのいう諸の對象の多様多種なるものが一つの認識となって私たちに所有されることになるのである。

カテゴリーの方からいえば、諸の對象へ適用されるということが言えるのである。前に言つたように、直觀に適用されるといってもいい。或は現象に適用されるといってもいいのである。もし、諸の對象の方からいえば、前に述べたように「諸の對象が知性の活動をはたらかせる」ことをするのである。だから、認識の構成されるところを知るには、如何にカテゴリーが適用されるかというところを



把えることも一つの方法であるし、又如何にして諸の對象が知性の活動（つまり思うこと）をはたらかせるかを把えることも一つの方法である。

諸の對象といっても、その多種多様は瞬間的な雜多のことではなく、それは私たちから綜合的に受けとられるものなのである。この場合、とにかく一つのものにして受けとられていることが、カントの言うところの Apprehension なのである。このアップレヘンシオンはアッパァツェプチオン（統覺）とは全く違つていて、けいけん的なものである。アップレヘンシオンは知性でなく感性の側のものである。けれども、綜合的である。その點で思うの方の統覺と同等性をもっている。そして又、觀るということで特徴づけられている感性の仕方（形式）は、ア・プリオリであるという點に於いてカテゴリーと同等性をもっている。しかし、カテゴリーそのものは感性的な何ものも具えていない。その點で全く對立している。諸の對象は與えられているということから、私たちは出發しているのであるが、與えられるということはその意味を廣くとることができる。カテゴリーにしても與えられていると言えなくはないかも知れない。しかし、諸の對象が與えられているというのは、その度その度に與えられているという意味である。カテゴリーとてもつまりは經驗（エルファーラング）の中のものではあるが、これはその度その度に現われてくるというように與えられているものでは決してない。萬物は生じ又消えて變り行くけれども、「變る」という私たちの考えの一つの仕方なるものは變ることのないと同様であって、カテゴリーは生滅的なものでは決してない。かようにして、諸の對象と諸のカテゴリーとは

全く對立せるほどに反對のものである。

諸の対象が單に雜然たるもの、瞬間的なものでなくて、とにかく一つのものとして受けとられ得るその綜合性は、空間・時間という純粋なる形式に背かないで、それと一致しているからである。空間（ひろがりという仕方）と時間（ひろがりでないもう一つの仕方）との形式は仕方である限り瞬間的なものでもなく生成消滅的でもない。仕方なるものは統一性を具えている。この統一性 Einheit はカテゴリーが本來具えている統一性と同等である。殊に二つの仕方のなかでも時間なる形式は、空間的なものが觸れてみられるという性質を具え得るのと違って、純粋に形式的 formal である點でカテゴリーと同等である。カントはどちらも普遍的で法則的である點で同種的であると言っている。

私たちは感性の側にある認識の諸要素と知性の側にある諸要素との間に、相反對していながらもまた同等性を示している狀態をもっと詳細にあげてみることができるであろう。相反對していて而も同等であるということは、矛盾と呼ばれる。認識はその諸要素の一つ一つに至るまでこのように矛盾の特質を具えていると言わねばならない。反對しつつも同じいとは矛盾していることである。それは一九世紀になってディアレクティークと呼ばれたものである。認識の構造の中核はディアレクティークであるといわねばならない。

「私は「認識の構造の中核」ということを言ったのであるが、先きに問題にした描形力（アインビルデウンクスクラフト）はこの中核に於いて私たちの思索を要求するのである。



納本

哲學史入門　上卷

定價　一八〇圓
地方定價　一八五圓

著者　三枝博音（さえぐさひろと）
發行者　東京都中央區日本橋小舟町二ノ四　小林茂
印刷者　東京都品川區南品川五ノ十三　森高繁雄
發行所　東京都中央區日本橋小舟町二ノ四（大阪市北區樋上町四五）　株式會社　創元社
電話茅場町(66)二〇六四・四〇八三・五二六三
振替東京一五六五・大阪五七〇九九

昭和二十七年六月十日　初版印刷
昭和二十七年六月十五日　初版發行

富士高速印刷・小高製本

萬一落丁亂丁がありましたら取替えます

ㅏㄴ32

## 創元社・哲學書新刊

| | | | |
|---|---|---|---|
| 哲學史入門 (上)(下) | 三枝博音著 | B6上製 | (上)180円 (下)近刊 |
| 西洋近世哲學史 全五卷 | ヴィンデルバント 豐川昇譯 | | (1)200円(2)230円 (3)300円(4)370円 (5)350円 |
| プラグマティズム | W.ジェイムズ著 桝田啓三郎譯 | B6上製 | 300円 |
| 法哲學の根本問題 | ラートブルッフ 横川敏雄譯 | B6上製 | 近刊 |
| 社會學的方法の基準 | デュルケム 田邊壽利譯 | B6上製 | 近刊 |
| 社會主義 | デュルケム 平山高次譯 | B6上製 | 近刊 |
| 社會學と哲學 | デュルケム 山田吉彦譯 | B6上製 | 近刊 |
| 宗教哲學 | カント 豐川昇譯 | B6上製 | 450円 |
| 心理學史 | ワーレン 矢田部達郎譯 | A5函入 | 450円 |
| マックス・ウェーバー | ヤスパアス 樺俊雄譯 | B6並製 | 150円 |

## 現代社會科學叢書

| | | |
|---|---|---|
| 自由からの逃走 | E.フロム著 日高六郎譯 | 280円 |
| 文化人類學入門 | R.リントン著 清水幾太郎他譯 | 近刊 |
| 男性と女性 | M.ミード著 戸川里子他譯 | 近刊 |
| 何のための知識か —アメリカ文化における社會科學の位置— | R.S.リンド著 松浦孝作他譯 | 續刊 |
| 隷屬への道 | F.A.ハイエク著 一谷藤一郎譯 | 續刊 |
| カリガリからヒットラーまで —心理學的にみたドイツ映畫史— | S.クラカウエル著 南博譯 | 續刊 |
| 權力と人格 | H.D.ラスウェル著 | 續刊 |
| 世論 | W.リップマン著 | 續刊 |
| 宣傳 —新しき政治力— | J.ドリアンクール著 | 續刊 |
| 集團心理學入門 | Ch.ブロンデル著 | 續刊 |